

わたしたちに祈りを教えてください

ルカ 1 : 1 - 13



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年7月28日  
聖霊降臨後第7主日

奈良基督教会にて

「イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、『主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください』と言った。」ルカ 11:1

イエスはあるところで祈っておられました。イエスが祈っておられる。その姿を弟子たちは何度も見てきました。それを見るたびに何かを感じます。

わたしたちもその場面を心に思い浮かべてみたい。

イエスは手を組んで祈っておられる。あるときは手のひらを上にして祈っておられる。あるときは座って、ひざまずいて、地に伏して、あるときは立って両手を上げて祈っておられる。沈黙の祈りの時があり、またはっきり祈りの声が聞こえる時があります。

イエスが祈っておられる。祈っておられる空気を弟子たちははっきりと感じます。何か伝わってきます。特別な何か。自分たちにはないけれども、自分たちが必要としている何かです。イエスが祈っておられる。そこにイエスの働きの中心というか、力の秘密があるように感じるのです。

それに対して、自分たち、弟子たちは祈ることに慣れていない。どう祈ったらいいのかわからない。自分の祈りには力がない。自信がありません。

イエスが祈り終わられたとき、弟子のひとりが思い切って尋ねました。

「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください。」

何と祈ったらよいのか祈りの言葉を尋ねているようにも思いますが、元のギリシア語聖書の言葉（単語）を順番に訳していくとこんな感じです。

「主よ、教えてください、わたしたちを、祈ることを」

「主よ、教えてください、わたしたちを」

教えてほしいのです。わたしたちを。知識が不足しているから補わなくては、という程度ではありません。根本的なことを自分たちはよく分かっていない。わたしたちを教えてください。ほんとうに学びたい。イエスさま、あなたがわたしたちの教師となってわたしたちを教えてください。大切なこと、一番大事な根本のことを。わたしたちはそれを必要としています。

「主よ、教えてください、わたしたちを」

教えてほしいのは祈りです。「＜祈りを＞教えてください」と訳されていますが、原文をそのまま訳せば「＜祈ることを＞教えてください」です。単に祈りの言葉や方法を知りたいと言ったものではありません。祈ることがよく分からない、自信が持てないのです。

弟子たちは、祈ることが自分の身に付いていない、自分の生活と結びついていないと感じていました。祈るとはどういうことなのか。祈ることそのものをイエスから学びたいと願いまし

た。イエスが祈っておられるのを見て、感じて、その思いが強く起こってきたのです。正直です。この弟子の中に、私たちを見る思いがします。

世の中にはひどいことが多すぎます。社会は不安と緊張が満ちています。自分たちの中にも堆積した不安や不満や葛藤があります。人びとはそのはげぐちを求めます。それである場合には人を傷つけ、ある場合には自分を傷つける行為に走ります。そういう中で、人を傷つけるのではなく、自分を傷つけるのもなくて、自分が何かに生かされて生きて行けるほんとうに確かなもの、真実なものがほしい。それがこの方イエスにはある。この方が生きた神さまを示してくださっていると感じて、信じて、ここまで弟子たちはイエスについて来たのでした。そのイエスの働きの中心にあるのは、祈りだと弟子たちは感じています。

「主よ、わたしたちを教えてください。祈ることを教えてください。」

「そこで、イエスは言われた。『祈るときには、こう言いなさい。“父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。”』」ルカ 11:2

イエスはその弟子の問いの中に、どんなに不安や困惑や切なる思いが込められているかを知られました。それで端的にこう答えられました。

「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ』 11:2

わたしたちの聖書では、イエスが教えられたこの「父よ」だけで1行使ってあります。この最初の1行、一つの言葉が大事です。

「父よ」と呼びかける。これが祈りです。これだけで祈りです。相手に心に向けて語りかける。祈ることは自分の気持や言葉を漠然と空気中に漂わせることではありません。祈りは、照準を合わせて、的を射るようにして、相手に向かって呼びかけること、神を呼ぶことです。

「父よ」 実際にイエスが口にされたのは「アッバ」。アラム語で、幼い子がお父さんと呼ぶ言葉です。

神さまはわたしたちを、ご自分の愛する子どもとして心にかけていてくださる。無関心ではありません。その神さまにわたしたちはしっかり呼びかける。呼ぶ声は、呼ぶ思いは、神に届くのです。

この「父よ」に続いてイエスが弟子たちに教えられたのは、わたしたちが週毎、日毎に用いている「主の祈り」です。わたしたちの用いている主の祈りは、このときあの弟子がイエスさまから教えられた祈りです。それはイエスが祈っておられた祈りです。それを2000年後のわたしたちも祈っています。主の祈りを祈るとき、イエスとわたしたちは、祈りにおいてひとつになるのです。

ただし、わたしたちが用いている主の祈りよりもルカ福音書のほうが簡潔です。

### 「御名が崇められますように」

これは元の言葉では「あなた（神さま）の名」です。神よ、あなたの名があがめられ、尊ばれますように。神を神として尊ばない現実があるからです。

### 「御国が来ますように」

これも原語では「あなた（神さま）の国」です。神よ、あなたの国が来ますように。天国を引き寄せる祈りです。この嘆きと混乱と不義の満ちた地上に、ここに、神の国の断片でも実現してほしいのです。

イエスが教えられた主の祈りは、「御名」と「御国」が最初に来ます。神さまのことを真っ先に祈るのです。「神が第一で、わたしたちのことが第二」。これが信仰の基本的あり方です。

しかしここにはイエスさまの深い配慮があるのです。わたしたちは自分と自分の周りに心を奪われ、圧倒され、打ちひしがれてしまいます。多くの心配、深い葛藤、不安、恐れに取りつかれてしまいます。イエスはわたしたちをそこから自由にしようとされます。わたしたちの心を神に向かって上げるようにされるのです。自分の関心の重点を自分ではなく神に置く。神の名と神の国に置く。神が働かれる救いの働きの中に自分も加えていただく。そこから次にわたしたちのことを祈る。神の御手がわたしたちを包み、導きます。これがイエスの祈り、主の祈

りです。

イエスは祈っておられました。その姿をわたしたちも心の目で見ましょう。問いかけたあの弟子のように、わたしたちも祈ることをイエスから学びましょう。

そのとき、イエスがわたしたちのためにもうひとつの配慮をしてくださるのを知りましょう。今日の福音書の最後です。

**「天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」ルカ 11:13**

聖霊の約束です。聖霊があなたがたの祈りを確かなものにしてくださる。

祈ります。

主イエスさま、わたしたちに祈ることを教えてください。神さまを呼ばせてください。あなたが教えてくださった主の祈りの中で、わたしたちを自分自身から解き放ち、あなたの救いの働きの中にわたしたちを生かし歩ませてください。そのために約束してくださった聖霊をお与えください。アーメン